

キャンパス・コラム

音読の勧め

『声を出して読みたい日本語』ほか、日本語を音読して味わおうという本が最近ブームになっているらしい。言語を声に出して勉強するというやり方は、私の学生時代にはごく当たり前のことだった。小学校の国語の時間には一人ずつあてられて、教科書を声高に読ませられたものだ。中学校になってからの英語では、先生の読むあとをクラス全員で一斉に復唱するのがお決まりの勉強スタイルだった。私はフランス語を教えているが、学生にとっては初めて習う外国語だから、自分の中学校時代の英語と同じだと考えて音読を重視することにしている。テープをつかうこともあるが、自分で読み上げ、そのあとを繰り返し学生たちに読ませるようにしている。

ところがある時期から、ほんの数人の者しか私のあとをついて来なくなったのに気づいた。学生たちに聞いてみると、高校までこういうスタイルの勉強をしたことがないと言う者

が結構いる。英語でも先生が一人で読み上げ、一人で説明しているだけだったというのだ。言葉の勉強でそんな授業がありえるとは思えないのだが……そこで、フランス語では違うのだと宣言し、声を出さないとダメだとしつこく言うことにした。発音、アクセント、イントネーション、音読はそれらのマスターのためにだけあるのではない。言葉のもつ深い味わいとか美しさといったものは声に出してこそ分かるものなのである。言葉への愛と感覚を培うためにも、昔ながらの音読を私は勧めたい。

広報委員 大野一道（経済学部教授）



編集室

10月11日でした。NHK夜7時のニュースは、この『Hakumon ちゅうおう』が冬季号で「蓮池さん特集」を組み、「12月1日発行予定」と、全中トップで伝えました。学生記者の関敦子さんが同級生を取材した（16ページ）当日の映像を1分15秒の長さで流しながら「写真・上はNHK取材の様子」。

事態は動いています。季刊誌でのごうしたニュース対応の編集は難しさがありますが、中央大学とのかわりにおいても最もアクチュアルで

「中心的な問題と判断し、「緊急特集」に踏み切りました。

はじめ蓮池さんの「多摩キャンパス訪問」も想定し、取材配置や取材方法の打ち合わせなど編集会議を数度。「ジャーナリズムの現場（にある）」感覚が学生記者の議論を活発にしました。

トップに、「独占」の内容的密度をもつ「蓮池さんとの40分間」、《帰還者たちの海峡》は本誌だけで読める気鋭作家の書き下ろしです。一挙22ページの特集が、それぞれの立場で問題を考え、関心を共有する契機になれば、と思います。

（広報課 田中紘太郎）

Hakumon

ちゅうおう

2002

冬季号

2002年(平成14年)12月1日発行 No.177

発行 中央大学広報委員会
〒192-0393
東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉

広報課 ☎0426-74-2146

印刷 泰成印刷株式会社
〒130-0026
東京都墨田区両国3-1-12
☎03-3631-8141